

服装規範への同調行動： Fishbein モデルの適用

山本 昌子

目 的

社会における多くの現象は社会規範によって規制されており、服装においても性別、場面別、肌の露出程度などに関する社会規範があって服装の秩序が維持されている。しかし、最近、服装における個性化が主張されるようになり、服装規範にも変容がみられるようになった。ここではいくつかの服装規範について、どの程度同調した行動をとるか、親や仲間の考え、自分自身の考えを測定し、Fishbein モデルを適用してその関連性を検討した。

方 法

服装規範として、1) 右の身頃にボタンのついたシャツブラウスを着る、2) 友人の結婚式にパンツスタイルで出席する、3) 盛夏、繁華街をタンクトップやショートパンツスタイルで歩く、4) 個人的に恩師宅を訪問するときGパンをはいてゆく。5) 場合によっては男女の見分けがつかないような服装をする。の5項目を取り上げ、これらに対する行動意図は、「ありそうだ」から「ありそうでない」までの7段階で評定した。この5項目の各服装に対して「対象者自身はどのように思うか」(態度)、「親、仲間はどのように考える」と思うか(主観的規範)をいずれも7段階尺度で測定した。

結 果

各服装規範に対する行動意図を「ありそうだ」から「ありそうでない」までの3カテゴリーに分け、態度、主観的規範についてもそれぞれ3カテゴリーに分割し、行動意図と態度、行動意図と主観的規範のクロス集計を行った。その結果、いずれの服装規範についても1%水準で関連性があり、服装規範に背馳した行動意図のある者は、そのような態度、主観的規範をもつ

ていることがわかった。また、行動意図を外的基準とし、態度、主観的規範を変数として重回帰分析した結果、いずれの服装規範についても標準回帰係数 (β) は態度よりも主観的規範のほうが大きくなっており、この種の服装規範には仲間や親など重要な他者の期待がかなり強く反映されていることがわかった。

学 会	日本家政学会第41回大会研究発表会
期 日	平成元年5月27日～28日
場 所	東京家政学院大学